

時	論
新	論
理	想 論

# アイヌ文化と学校教育、そして博物館

加藤 謙一  
(かとう けんいち)  
本館機関研究員

## 広がる、アイヌ文化に 学ぶ取り組み

三月二六、二七日の二日間にわたって、民博で公開フォーラム「日本における多文化教育―アイヌ文化の場合―」が開催された。アイヌ文化が学校教育のなかで取り上げられている状況を、その現場にさまざまな立場でたずさわる関係者の報告に基づいて考えるまたとない機会となった。

わたしにとって驚きだったのは、北海道とは遠く離れた東京や大阪の小学校でも、アイヌ古式舞踊をはじめとする伝統文化を題材にした教育実践が広がりをもって続けられてきたという事実であった。ひとつひとつの実践からは、アイヌ文化と出会ったときの感動を子どもたちにも伝えたいという教師の熱意が伝わってきた。そしてこの事実は同時に、フォーラムの主題ともなる重い課題をわれわれ参加者に与えることになった。

## 「文化の利用」という問題

報告者の一人、本田優子さんは、小学校でアイヌ文化教育にあてられる時間が減り続けるなか、自然と共生するアイヌの暮らしや伝統文化を学ぶ内容が残り、その歴史や現状を学ぶ内容が削減されている点を指摘した。そしてそのことがアイヌを「現代文明人と対置する存在として固定化し、アイヌの人

びとをわたしたちが同じ現代を生きているという共時的イメージをもつチャンス奪うことにつながっていると問題視した。

また、報告された学校の実践に対してアイヌの立場からコメントを求められた丸子美記子さんは、アイヌ文化に親しむ取り組みが一層広がることを願いつつも、「自然と共生するアイヌ」という部分だけを取り上げるような「アイヌ文化の利用」はやめてほしいと訴え、そのジレンマを吐露された。

確かに、フォーラムで報告があった実践の多くは、小学校低学年を対象にアイヌの伝統的な文化や自然観を踊りやモノづくりを通じて学ぶものだった。子どもたちにとってはアイヌ文化に親しむ貴重な機会となっているが、そうした経験を高学年で歴史や人権教育などにつなげていかなければ、丸子さんの願う「アイヌ民族に対する正しい理解」を深めていくことは難しいだろう。

## 求められる共時的まなざし

フォーラムでは、多文化教育の現場で「文化に所属する側」の立場を「文化を教育であつかう側」が配慮することの大切さと、むしろかきさを共有できた。この二者は、「異文化をその対象とする国内外の民族学博物館の展示においては、それぞれ「展示される側」と「展示する側」と置き換えられよう。民博はこれに「展示を見る側」をくわえた三者間の交流と啓発の場としての博

吹田市立北山田小学校ではアイヌの人を迎えて古式舞踊の実践がおこなわれた



丸子美記子さん  
(写真左: 関東ウタリ会長と  
本田優子さん(札幌大学教授))

物館、すなわち「フォーラムとしての博物館」をめざしている。我々は、展示に向けられる「見る側」のまなざしを、「展示される側」との共時的な状況にいざなう努力を今まで以上におこなっていく必要がある。さらには、展示との対話を通じて「見る側」に生まれる多様な経験や解釈をいねいにすくい上げること、そしてすくい上げたものを三者間の相互理解に活かすための場づくりを考えていかねばならない。